

大庄屋文書から見た酒田の世相（三）

須藤 良弘

『東北公益文科大学総合研究論集』五と六に続いて、酒田町三組の内、酒田市立光丘文庫に所蔵されている内町組の大庄屋・伊東家と米屋町組の大庄屋・野附家文書から江戸期の酒田の世相を見てみたい。なお、文中の句読点は筆者が付け加えたものである。

一、生活の向上と奢侈禁止令

たばこも普及してきたが、年貢の対象となる本田畑には前々からたばこの栽培は禁止されていた。宝永元年（一七〇四）にも次のような御触が出された。

「今度御書出、本田畑二前々より多葉粉作り申間敷候由、被仰付候、去未暮中、江戸御書出を以、御触被仰付候二付、酒田御町中本家並名子借宅之者迄」も徹底させ、調べた結果、「酒田御町たはこ作り候者、無御座候」であった（伊東家文書『御用帳之内書抜』）。

百姓・町人の絹物着用禁止は度々出されたが、守られないことも多かった。そのため安永五年（一七六六）に、違犯者の名前を同心や目明より届け出させるようにすると、次のような通達が出された。

「絹布御停止之儀、又々猥ニ相成候趣相聞申候間、嚴敷申渡、猶又、右改方御同心並目明共へ申付、不相用候もの見当候ハハ、名前承届申出候様ニ申付候」(野附家文書『安永五年 諸御用控牒』)。

婚礼等で絹物を用いないという届けは多く残されている。一例だけあげると、天保十三年(一八四二)十一月二十八日に上内町嘉兵衛から「私江荒瀬郷泉新田村長之助娘、明廿九日女房ニ貰引取申候、衣類之儀ハ御停止之品一切相用不申候、尤婚礼当日打寄候者、是又御停止之衣服着不申候、万一相違仕候ハハ、私共者勿論、親類五人組迄何様之曲事ニも可被仰付候」(伊東家文書『天保十二年・十三年 御用帳』)が出された。禁止の絹物を用いた時は、本人・家族は勿論、親類・五人組までも処分を受けるというものである。

天保十二年、幕府は奢侈禁止令を出した。翌十三年、酒田町奉行所より「去丑年、委細御制法被仰出候之内、相漏候條も有之」として、次のような物が追加され、「堅売買停止」とされた。

「庭石夜燈」、さらに「瀬戸色々皿・小皿類惣而当用之品々ハ格別珍敷高料之品仕入いたし、売買致間敷、尤瀬戸植木鉢売買堅停止」で、特に瀬戸類は珍しいもの、高価なものは仕入れも禁止である。ただし、今まで仕入れていたものは「当十二月限売捌、来正月より売買一切無用之事」である。その外に、「珍敷高料」の髪飾り類・紙入れ・きせる・煙草入れ類・金魚・非鯉(緋鯉)である。庄内名産といわれている花ろうそくも、「花紋燭拵並売買不致様被仰候」である。

今まで「御領分中」より出荷されていた「庭木鉢植等之草木」はやむを得ず(無據)売買させていたが、これからは「何草木ニよらず、庭木鉢植売買一切停止之事」となったが、ただし「葉草・桑・楮・松・檜・さわらの類之苗ハ別段之事」として許可されている。

食生活の向上を示すものと思われるが、促成栽培も広まってきたようである。速成栽培された野菜は「もやしもの」といわれていた。栽培方法は「障子を掛」、「室之内江炭」を入れて置くものであった。天保十三年、「きゅうり・茄子・

いんけん・ささげ之類、其外もやし物と唱」えるものは、「売買致間敷」であつた。翌年にも、「野菜之類、色々手入いたし、もやし物と唱、時候外ニ売出候儀、いたし間敷候」である。

どの程度禁止されたかは不明であるが、数十種類の菓子とその値段が記されている。その一部だけあげると、「古来より拵来候菓子」では、「五重松形落雁 壹枚ニ付三百文」、「かふら形落雁」は一枚に付き七十文、「福女形落雁」は一枚五文である。さらに「金平糖・カヤ糖・松風・丸山せんべい・朝顔せんべい」など、外に「雛菓子之類、其外下品之雑菓子色々」とある。

「文化已来追々新製と相見候菓子之類」として、文化年間から新しく作られてきた菓子をあげている。それには「沖之石・御所桜・金玉糖・宮城野・かすてら・茶きん糖・笹の友・さん花糖・玉手箱」などである。私にはかすてら以外、どんな菓子がかわからないが、多くの菓子が出回っていたことがわかる。（『前同』）

油揚げも作られるようになった。ここでは奢侈品としての禁止ではなく、値段が決められている豆腐を油揚げに加工し、「油上ケ豆腐」と名付けて、豆腐を小さくしたり、値段を上げようとする豆腐屋共に対し、町奉行の意を受け、町年寄・大庄屋からの次の通達が出された。

「豆腐値段之儀、兼而御定被仰出、有之候処、近頃油上ケ豆腐など名付、高値ニ売出候者有之哉ニ相聞、不埒之事ニ候、已来、形等も小振ニ不致、是迄其形を以御定値段ニ売シ可申候、若、心得違ニ而、形を小振ニいたし候哉、又ハ御定値段より高値売出候者於有之候ハ、沙汰之上急度可申付候」（伊東家文書『天保十四歳 御用帳』）。

なお、二十年後の文久三年（一八六三）にも、「豆腐値段之儀、兼而御定被仰出有之候処、近頃油上豆腐拵と名付、高値ニ売出候者有之哉ニ相聞、不埒之事ニ候」と町年寄・上林熊記と大庄屋から禁止の通達が出された。それに対して、「惣豆腐屋共」と「三町惣肝煎」から、「右被仰渡之趣拝見、承知奉畏候、右御趣意堅相守可申候、萬一違犯之者御座候儀者、急度可被仰付旨奉得其意候、依之以連印御請書差上申候處仍如件」（野附家文書『文久三年 酒田町組米屋

町組御用留牒』との御請書が出された。

物質的により良い生活を望むようになってきた民衆に、上からのこのような禁令がどのくらい守られ、効果をあげたかは大庄屋文書に記録がない。

二、あきない上の諸問題

商人町・酒田では商売をめぐる多くの問題が発生している。その一つは宝永四年（一七〇七）、二人の染屋に、他の全部の染屋が新しく開業したものととして大勢で押し込み、道具を封印した事件である。

「亥六月十二日惣染屋共打寄り、七ノ町半右衛門・近江町藤内新規染屋之由申候而、大勢押込、染屋道具封印仕候、依之右両人之者共新規そめ屋二無之段品々申候二付吟味」、新規の染屋でないとの二人の主張が、認められ、「染屋道具封印切申候様申渡候」（伊東家文書『池田家御用帳之内書抜』）。

凶作の年には酒田港から他国への穀類の移出は、冲出停止として度々厳しく禁止された。穀類を取り扱う商人には大変な迷惑であった。元文三年（一七三八）、「乍恐以書付奉願候」と、元米屋町治左衛門から、昨年購入した「粉糠」二百俵、浜町半右衛門から粉糠三百俵が冲出し停止となり、内々で売り払おうとしても買い手がなく、迷惑しているとして次ぎのような冲出し願いが出された。なお、他の商人からも「飴糠」五十俵や「麩糠」二十俵の冲出し願いも出されている。

「右者、拙者共致家業二仕候二付、去年中より段々買入置申候所二、今度沖之口御停止被仰付、冲出成兼候二付、内々二而売払申度奉存候得共、買手も無御座、小前之拙者共必至と迷惑至極奉存候、依之乍憚奉願候、以御慈悲右之粉糠冲出仕候様、被仰付被下置候者、難有仕合二奉存候」（伊東家文書『内町組御用留帳二』）。

屎尿は農家にとっては貴重な肥料であつた。農民は町家と相談の上、下肥の値段を決め（相對買）、直接売買していた。ところが酒田に下肥の仲買があらわれ、値段が高くなつたことから安永八年（一七七九）、町奉行により、次のように禁止され、違反した場合は処罰されることになった。

「郷方二而、御田畑仕付候肥之儀、前々より酒田大山加茂邊より買入候處、近年於酒田、致中買候もの有之候、御百姓共相對買成兼、自然と値段高値二相成候趣二付、向後肥中買之儀御停止被仰付候故、相背候者於有之者、可為曲事者也」（伊東家文書『安永八年 御用帳』）。

寛政元年（一七八九）、酒田町組、内町組、米屋町組の酒田三町の塩屋全員が塩の値段を一割安くし、それに一割の利益を加えて販売する申し合わせをしたところ、その申し合わせに違反して少々安く売つた塩屋が出た。塩屋共がその違反者に「振廻料」（振舞料とも書いている）の名目で罰金を出させたことからトラブルが発生している。

「三町塩屋共塩値段之儀、壹割減といたし壹割之利を加へ、致商売候様、内々申合、定書被致連判候所、去四月中上内町宇兵衛所二而、申合より少々安く売候段、塩屋共及承、一統申合、振廻料として金壹両為差出候由、当二月中も宇兵衛二而壹割之利を取り売渡候所、是又申合より下値二売候由二而、錢三貫六百文為差出候由、同町平兵衛所二而、下値段二売候段」。

この件について町奉行から塩屋共が吟味を受け、塩屋共は、「答　く右宇兵衛平兵衛儀、申合より下値二売候ゆへ、外塩屋共不商二而、相続も難相成、迷惑仕候二付、申合候通振廻料為指出申候、升之儀も不同御座候二付、新升二申合候儀二御座候」と、申し合わせより安く売られては他の塩屋は商売が成り立たないと答弁している。さらに、塩屋が奉行所から公認の焼印が押されていない升を使っていることを追求されたのには、焼印のある升が同じ大きさでなくなつたので、新升を使用していると弁解している。

町奉行所は、「大勢申合等いたし候儀、徒党を結び候、何様二而兼而御停止二候處、如何相心得、申合之連判等いた

し候哉、其上御焼印茂無之、勝手次第之升相用ひ候儀、重々不届二候、此段可申慎候」(野附家文書『寛政元年 御用控』)を申し渡した。塩屋共の申し合わせは禁令の徒党を結んだものとし、さらに焼印のない升を使っていることに對して、宇兵衛・平兵衛を含む三十名の塩屋全員を謹慎とし、塩屋が二人から取った振舞料は奉行所が取り上げ、改めて宇兵衛と平兵衛に一両ずつ「相渡」している。

他国酒や御料酒の販売では多くのトラブルが起きている。寛政七年(一七九五)十一月、「大山・丸岡・餘目・手向・松山酒、酒田並川北郷中共三月中旬より十月晦日迄、樽酒・小売・茶碗売共不苦候事 右之通以来心得違無之可被申渡候」(野附家文書『御用扣』)が出された。これは大山等御料から税金のかからない無役の安い酒が酒田や川北に入り、酒田で造る酒が売れなくなるとして、酒田の造酒屋などがその禁止を度々願ひ出ていたことから、十一月一日より翌年三月中旬迄は御料の酒の販売は樽酒から茶碗酒にいたるまで販売を禁止していた。

文化十年(一八一三)には他国の酒が大量に入り、揚酒屋がそれを売るので、御役錢を引き受けている酒田の造酒屋が家業にもかかわるとして、次のように他国酒の販売期間を揚酒屋に守らせるようにと願ひ出た、「近来、他国酒莫大ニ入込、揚酒屋共平等ニ売捌、造酒屋共家業ニ拘り、一統迷惑之趣申出候、元來他国酒之儀者、酒田御役錢引請之内ニ籠居候得者、造酒屋共迷惑ニ不相成様、以來三月中旬より九月晦日迄可売捌候、若心得違造酒屋之制止も不相用、猥ニ売出候者、於有之者、急度可申付条、此段揚酒屋共江可申渡候」(『前同』)。

天保十四年(一八四三)、御料酒の問題が又も発生した。「〽爰許酒造屋共、大山酒無役相成候為、割安ニ而売捌、地酒一向売透不申必至と相成、依而御他領酒売捌御差止被成下度候」〽という歎願書が出された。そのため、「御料酒売捌方、小升売・茶碗売等之儀者、懸合中ニ付、当分差留候」〽となった。

ところが、揚酒屋は地酒に安い大山酒を混ぜて小升売りしている問題が起こり、酒田酒造屋惣代の酒屋弥助・渡部三郎右衛門・本間信十郎から御吟味方御役所へ、「今度御沙汰中、御料酒当分小升・茶碗売御差止被仰付、難有仕合奉存候、

依之私共造酒相開売透可申と奉存候所、不相替引方手薄二付、難心得罷在候處、揚酒屋二而、大山酒地酒二打混し、小升売いたし候、揚酒屋との内より私共手間二而買取候始末」が出された。

そのためか、「御料大山・丸岡・餘目村々之造酒、御領内江売入候儀、先達より度々申達候儀有之筈二候へとも、今度御料酒屋ともより」、「御料造酒、御領内江売入候分、酒田並川北郷中江ハ三月初面迄売出不申、鶴ヶ岡並郷中江ハ四月晦日迄売出不申」が出された。

しかし、八月中迄には酒田で造った酒は大体売りつくしていたのが、無役の御料酒のため、今回は売れ残り、それに暑さで変酒するので、郷方にも売りたいとして、造酒屋惣代三郎右衛門から、「御料酒之儀、是迄之仕来無御座、無役仕、酒田六拾四軒二も揚酒屋二も、右無役酒平等二売捌候二付、私とも造酒一向売透不申、是迄年々八月中迄二ハ荒々売透候へとも、此節多分之残酒二而、当年長々と酷暑二付、仲間とも之内追々変酒出来仕、私とも造酒酒田御町方ハ勿論、郷方二もく売捌申度」(伊東家文書『天保十四歳 御用帳』)が出された。

三、なかと藤蔵の駆け落ち

明和元年(一七六四)、「八軒町藤吉娘なか、鶴岡八軒町久三郎と申者へ致奉公居候所、三日町藤蔵と申合、三月中主人久三郎方を致欠落、吹浦御関所を偽り、由利郡へ罷通り、七月中罷歸候處、盜賊御改方二而及御聞被成、盜賊之風聞在之由二而被召捕、御町奉行所へ御渡被成候二付、早速牢舎被仰付候、其後御吟味被仰付候處、盜賊いたし者とも相聞不申候得共、御関所を偽り由利へ通候段甚不届二被存候、十一月十一日右藤蔵ハ御追放二被仰付、藤吉娘なか永く藤吉へ御預ケ被成候」。

なかと藤蔵には盗賊のうわさもあつたが、盗賊はしなかった。しかし「申渡之覚」には、なかが「久三郎宅を欠落いたし其節、久三郎妻江偽り衣類等かたりとり」とある。なかは「藤蔵と一趣二立帰重々不屈至極二候、急度可申付候得共、別段之用捨を以」と嚴罰をまぬかれ、酒田米屋町組八軒町の親藤吉に預けられた。ところが同年十二月「藤吉娘なか（二十一歳）儀、去申之閏十二月廿五日与風罷出、行衛相知不申候」と、なかは突然行方不明になったと翌二年二月に届け出された。

明和三年七月、肝煎伊兵衛より米屋町組大庄屋野附と池田に、「拙者支配八軒町藤吉娘なかと申女、不調法ニ付親藤吉へ御預被仰付候処、去々十二月中出走、右なかと申女親藤吉へ立帰候間、御注進申上候」が出された。戻つて来たなかは、「右なか立帰り者故、牢舎被仰付候、十四日之夜五ツ時前、御同心衆藤吉方へ参り、直二縄打候而、御役所・五人組縄取ニ而参申候、御役所より下り請取申候」と、なかは逮捕され、牢入りとなった。

同年八月、なかへの「申渡之覚」には、「又々親藤吉へ永ク預ケ置候以来、猶致家出等者、父子とも二嚴重可申付候、親藤吉には「為致家出」が違うだけで同文である。なお、家出を繰り返したなかは、「格別之御時節故」（野附家文書『諸御用控帳』）と、親預かりという当時としては軽いと思われる罰となつたのは、「殿様御家督被為蒙仰付」からであらうか。その後のなかの消息は不明である。

四、渡り奉公の停止

こちらでも御家中や町方等に奉公すれば暮らしていけるのに、江戸で奉公する者が増加した。そのため国元では農民や奉公人が不足となり、さらに渡り奉公中、行き倒れで藩主の名を汚したり、迷惑をかけ、或いは路頭に迷う者も出、戻つ

てきても江戸の悪い風俗を村の若者に移させるとして、天明六年（一七八六）、改めて渡り奉公停止が強く出された。

「近年在町之者共、江戸表江登り、所々江渡り致奉公居候間ニ行倒候者多、御名をも出シ、上之御苦勞ニ茂相成候、古来ハ他所奉公御停止之事候所、いつの頃よりゆるみ候哉、近来渡り居候者多相聞候、第一御国許農民並奉公人等も自不足ニ可相成候、爰元御家中又者町方等ニ致奉公、夫々身寄之者も在之、如何様ニも暮方可相成処、畢竟渡奉公人心懸罷登候者、多ク者年若之ゆへ三年ニ而、終ニハ路頭ニ迷ひ候躰ニ至、実に不便之事ニ候」。

さらに、「渡り奉公相勤、数年之後帰国いたし候而も、風俗氣象共ニ江戸風ニ相成、村所之若もの共江も、自然と其風俗移り可申、宜からざる事ニ候、依之、以来ハ古来之通渡り奉公候儀停止申付候」（野附家文書『天明六年 諸御用控』）となった。

五、集団での家出

男女とも家出については数多くの記録が残されているが、ここでは二例の集団による家出だけに留めたい。

安永八年（一七七九）、「御料面野山村勘太郎下男浜中村与三郎、同千安京田村六之助下男湯の浜村丑右衛門倅大助、同村七郎左衛門下男浜中村弥介弟弥八、右三人五月七日出奔いたし候ニ付、入念相尋候様、人相書以御触相廻ル」（伊東家文書『安永八年 御用帳』）。この御用帳によると、外に同日「面野山村御百姓与右衛門弟十藏出奔」し、翌五月八日には面野山村の三人と千安京田村の一人が出奔した。出奔理由とその後どうなったかはわからない。

天保七年（一八三六）三月、親類・五人組・長人・肝煎連名で大庄屋に、「酒田米屋町組筑後町三右衛門先月廿二日無行衛ニ罷成候ニ付、人相衣類書を以奉願候」と同文の「同町半右衛門二男半四郎」が出された。三右衛門は三十四歳で、

人相は「中脊中肉、顔面長、色黒く」、衣類は「木綿茶縹古綿入一ツ、く」、半四郎は三十六歳（人相・衣類略）である。続けて、「右両人儀、先月二十二日与風家出仕、罷帰不申候間、心付之所々相尋候得共、行衛相知不申候間、其段申上候所、猶又入念相尋候様、被仰付奉畏、親類五人組申合手分仕、大山松山羽黒領迄色々相尋候得共、今以相知不申候、依之乍恐奉願候、何卒以御慈悲、御郡中御尋被仰付被下置候ハハ、難有仕合奉存候」（野附家文書『天保七年 御用控』）。三十代の男二人が突然家出した理由はわからない。

六、町離への差別

穢多非人への差別は多く見られ、享保十三年（一七二八）に「町離共江仰渡候」（伊東家文書）が出されている。ここでは同文の天明八年（一七八八）の「覚」を紹介したい。武士・町人・百姓に無礼のないよう、御用を受ける場合はかぶりものをはずし、はきものをぬぐ事、ぜいたくをするな、違反した場合は処罰するといふものである。

「御給人ハ不及申、御町人御百姓ニ致慮外間敷候、惣而從諸人用事申付候節、かぶりものをはつし、はきものをぬぎ、用事可承候、其外奢ケ間敷事少も不被可致候、此段町離共江可被申付候、若於相背者、吟味之上急度可申付候」（野附家文書『御用控帳』）。

七、お祭りさわぎ

正月行事や盆の時、若者のさわぎ過ぎには毎年のように嚴重な注意を受けている。明和四年（一七六七）、盆の踊りで雑言をはく者や口論があり、そのため時間の制限、最近の乱れた盆踊りから古来の踊りにもどり、自然ににぎわうようにすること、費用をかけないことなど次ぎのような注意が出された。

「近年盆中、若者とも大勢申合、猥ケ間敷儀等在之、騒々敷相聞候、此已後右躰之儀在之候ハハ、見当次第名前相糺可申事」として、「盆中往来ハ勿論、踊場所にて雑言等いたし候者、是又前段之通可申出事」、「仕組踊り昼之内ハ格別、暮より未、堅おとらせ申間敷候」、「近年おとり風俗猥に相成り、時々口論等有之候由、甚不宜相聞候、此已後、古来のおとりにて盆中自然と賑之様子相心得可申候、去ながら盆中之物入等無之様ニ可致事」（野附家文書『明和四年御用控帳』）。

正月行事では朝鳥追いや地蔵の勧進などが注意を受けた。安永元年一月、「十六日地蔵之為勧進、罷出候もの、異形之風体致間敷候、且又御町猥ケ間敷儀無之様、罷出居候様ニ廻文を以、きも煎共申達候、目明共にも右之趣申達候」（伊東家文書『御用之書記』）。なお、「異形之風体」は「面をかふり、又ハ顔をかくし、艷色罷出」とか「顔彩色致」などとも書かれている。

天明八年一月には、「近年、朝鳥追として夜中太鼓打、歩行候段、甚不宜候間、是又罷出不申候様、可申付候」、「十六日宮建立として、顔を隠、異形之風俗いたし出不申候様、可申付候」（野附家文書『諸御用控帳』）。この宮建立は地蔵の勧進の事と思われる。

婚礼や家の移転の時、祝儀を強要する事や正月十四日の祭堂（塞道、才堂）の夜に、やかましく太鼓を鳴らしたり、

店の看板やひさしにいたずらしたり、はずしたりする若者が出、天明九年一月十二日、「前々之通博奕御停止、並嫁祝ひ地藏勸進之儀、左之通相触候」として、次のように停止されている。

「前々被仰渡候通嫁祝ひ御停止二候、婚禮又者家移之者共江祝儀乞候儀、兼而嚴重御停止二候所、心得違右体之祝儀乞候者有之由相聞、不埒二候、此末至而堅相守、少したりとも、祢たりかましき儀申間敷候、尤十四日暮方より太鼓取上可差置候、近年御町方看板ひさし等いたつ（三字虫くい）はつしあるき候者、在之由も洩聞有之、不屈之至二候、依之一町切五人組頭之者共両人宛罷出候様、一町切見次、右体之儀無之様、急度相守可申候、若不相用、太鼓打あるき候もの有之候ハハ、町名聞届、太鼓押置、可申出候」（伊東家文書『天明九年正月吉日 御用之書記』）。

その後も祭堂での若者による太鼓打ちが改められなかった。寛政八年正月にも次のように、太鼓打ちの時間の制限や、十四日の夜には十五歳以上の若者を祭堂宿に立ち寄せないようにと指示されている。

「一、祭堂之儀、前々より三町一統二相守候様申付置候得共、近年猥二而、甚等閑二相心得、不埒之至、十日より十六日迄明ケ可申事 一、太鼓相渡儀者十二日より相渡置、七ツ時二相成候ハハ、さも入宅江差上置可申事 一、十四日之夜、十五歳以上之者祭堂宿江為立寄申間敷候、尤太鼓打町々歩行候儀、前々より停止申付置候所、心得違、町々一統夜半より太鼓打、騒ケ敷相聞、甚不屈之至二候、若不相用候而、太鼓打候もの有之候者、召捕、急度可及沙汰候」（野附家文書『諸御用控』）。

八、風水害

酒田は火事が多いことでは知られているが、風水害も多かった。特に水害は新井田川岸である。次は貞享四年

(二六八七) 六月十四日の米屋町組の水害の状況である。

「一、家三十九軒米屋町之内八軒町、内廿四軒、内一軒潰、東之端両側家之内水之高サ三尺五寸上ル、少々不同御座候。

一、家十五軒米屋町之内一ノ口川端町、不残家之内水之高三尺五寸上ル、少々不同御座候。 一、家四十一軒米

屋町之内山王堂町、内廿八軒、東側不残、両側南北ノ端家之内水之高三尺五寸より一尺五寸迄上ル、少々不同御座候」。

なお、前年の五月二十五日にもこれらの町々の六十二軒に「水上り申候」である。

同年、米屋町組大庄屋の野附と池田から御町奉行所に出された大風の被害は、「一、家壱軒、一ノ口川端町平兵衛。

一、家壱軒、同町弥右衛門。 一、家壱軒、八軒町仁左衛門。 右者九月九日之夜大風ニ而、吹つぶれ申候。外

二内町五軒、酒田町八軒、都合十六軒」(伊東家文書『書拔』)である。